

まちにアートの風が吹く。

高知の竹村が面白いらしいぞ。

どうすればできるかを
考えると
できない仕事って
ずいぶん減ると思うんですよね。



竹村利道さんプロフィール

1964年、高知県生まれ。1988年よりソーシャルワーカーとして地域の障がい者支援を行う。2003年に「特定非営利活動法人 ワークスみらい高知」を立ち上げ。自ら事業者として、弁当やケーキなどの製造・販売を通して、障がい者の就労機会、自立支援を行う。現在、アートゾーン薬工倉庫（2011年12月23日オープン予定）の立ち上げに奔走中。

高知市大原町にある甘味茶寮「さくらさく」、帯屋町アーケード内にオープンしたひだまり小路工佐茶カフェなど、話題の飲食店7店舗を経営し、障がいのある人約120名が働く場所を作っているのが、NPO法人「ワークスみらい高知」の竹村利道さん。そして現在、高知市を流れる江ノ口川、一文橋にある薬工倉庫群をリノベーションして、「アートゾーン薬工倉庫」をつくるため東西奔走している。グルメ雑誌の取材でお店が載るのはOKだが、障がい者がまちで働く、生きていくことはニュースではないから、そういう視点での広報はしないという竹村さん。話題の飲食店経営、竹村さんの歩んできた道、アートゾーン薬工倉庫のことについて話してもらった。

「今回の美術館は、日本財団が全国に10か所、「アート・ブリュット」「アウトサイダー・アート」を中心に、芸術の楽しさを紹介する美術館を整備していくという話があり、高知の竹村が面白いことをやっているから、やらなにかということになりました。

そこでグラフィティの信田さんを中心に、周辺にいるアートの携わる人、劇団や自主上映団体、ミュージシャンや音楽関係の人など、今までグラフィティを中心に広がってきた文化のエネルギーを使っていきたいと思う、この薬工倉庫群に、美術館、コンサートや映画、演劇などに使える多目的ホール、そしてレストラン。この3つが中心となる

まちにアートの風が吹く。

施設（アートゾーン）をつくっていくと計画が進んでいきます。

この美術館の話が日本財団からあった時に福祉という視点で考えると、すごく狭いものになってしまっていると思いました。福祉関係者で委員会をつくると、障がい者のためだけにという話になってしまう。それよりグラフィティや沢田マシジョン、洞ヶ島ナイトバザール、海洋堂、いろいろなジャンルのアーティストや漫画家、アートの関わる作家など、色々なところとつながっていく。そこに自然と障がいを持った人が関わる、ということが福祉的な意味合いでも大きなことだと思います。」

地に足が着いたとき。

竹村さんは大学卒業後、高知市の病院でソーシャルワーカーとして働き、その後福祉関係の仕事に就く。しかし、その頃は「障がい者だけのもの」をつくってきたので、かえって世間から「障がい者を孤立させてしまった」という思いがあるという。そんな葛藤を抱え、18年間勤めた職場を退職。障がい者の就労支援のためのパン屋などの経営をはじめ。しかし理念はあっても商売のことは素人で、2年で店じまい。

「事業が失敗して、お金が回らなくなると、このままなら死ぬと思ったんです。その時に初めて喉の奥から黒い塊が出てくる感じで、不安って形があるとかわかりました(苦笑)。本当に底へ落ちたから、地に足が着いたんです。そこで覚悟ができて、本当に生きようと思った。僕は駄目な性格だけど、障がいのある人が新しいステージに立つ社会を作りたい、その一念だけは嘘がない。だから、そのためには生きなければならない。」

高知市江ノ口川。
一文橋エリアに立ち並ぶ、歴史ある薬工倉庫。
その大切な資源を再生して、
新しいアートゾーンが生まれようとしています。
この冬、12月23日にグランドオープンする
「アートゾーン薬工倉庫」は、
美術館、コンサートや演劇、
映画上映ができる多目的シアター、
そしてレストランなどで構成。
その代表者となり、運営に関わるのが
NPO法人「ワークスみらい高知」の竹村利道さん。
話題の飲食店経営、障がい者の雇用と就労支援、
そして「地域を活気づける」アート活動。
以前から会いたいと思っていた竹村さんに
じっくりと話を伺いました。

まちにアートの風が吹く。



帯広町アーケード内にオープンした、ひだまり小路「土佐茶カフェ」土佐茶を中心とした地元食材が楽しめるお店だ。TEL. 088-855-7753

前の商売は、作ったから買いに来てというスタンスだったけど、再スタートの時に弁当店を選んだのは、弁当は売りに行けるからなんです。お客さん目線で徹底的に考えました。2000円以上で配達するとか、日替わりだけ配達するなどが主流の時代でしたが、それは店側の目線ですよ。だから、当時は30種類くらいの弁当を、金額も100円から500円まで幅広く作りました。また配達も100円でも500円でも3000円でもしました。福祉関係の場所にも配達に行きましたが、竹村さん、何やってるんですかー」って(笑)。身なりも汚い格好でしたから。でも、その時は障がい者のためにやっていますというつもりも毛頭なかったんで、「お弁当売っていますから、よかったです」と言えるくらい、地に足が着いていて、全然恥ずかしくなかったです。」

車椅子のアナウンサーがいたっていい。

「お客さんの目線に立って考えてみる。するとお客さんはんちゃんと付いてくれることがわかりました。だから次にカフェを始めるときも、モーニングみたいな安くて美味しいメニューが、なぜ朝の数時間しか食べられないのか?それなら閉店までずっとそんなメニューをやろうと考えたんです。また、食後のセットになったドリンクも、アイスコーヒーになったらプラス50円、ミックスジュースは選べないとなった時に、違うなと思ったんです。僕は商売のプロではないけど、お客さん目線で喜びそうなことを考えた時に、食後のドリンクが追加料金なくいろいろ種類の中から選べることは嬉しい。だから圧倒的に食後のドリンクは皆さんミックスジュースを選びます(笑)。土曜・日曜日だと日替わりランチ(定食)がない所がある。それもおかしいと毎日日替わりをかまえます。」

まず竹村さん自身が店全体のイメージ、コンセプトをつくり、それから設計士やデザイナーなどプロの力を借りて形にする。オシャレな店舗、洗練されたデザイン、こだわりの器。障がい者が働いている店ということはお客さんには関係のない話で、お

客さんがこの店にどういう価値を見出すか。そこにこだわっている。障がい者の雇用について、もう少し突っ込んで聞いてみた。竹村さんは「福祉の現場では、努力したら出来るかもしれないというスタートが少ないうので、大事なことは環境づくりだ」という。竹村さんはHOWで考えたら、やれる方法はたくさんあると話す。手がないからできないのではなく、手に代わるもの(機械)を導入したらできるし、計算ができないスタップが80gの餃子を分けるには、スイッチを導入する。どら焼の焼き方、ケーキのカットの仕方、できないじゃなくて、どうすればできるのかを考える。それだけの整備をしっかりとコーディネートすれば、働ける環境ができるという。

「今は会社に120名の障がい者が働いていますが、これは正しい社会の在り方ではなく、120社に一人ずつ受け入れてもらったほうがいいですよ。勿論、障がいを持っている人も変わらなくてはいい。僕に出来るわけがない」という固定観念、障がい者自身が将来を勝手に思いこんでいる。不思議なのはデザイン専門学校に車椅子の学生がいないんです。絵が好きだから、デザイナーとして独り立ちする。第一の村岡マサヒロになってやる。タクシースは車椅子で運転できます。ドアの開閉や緊急時に問題があるじゃないですか?と聞かれれば、隣に知的障がい者を載せて、そこをカバーしてもらおう。テレビに出ているアナウンサーも、銀行の受付も適応する能力があれば障がい者でもいと思います。どうすればできるよくなるかというのを考えていけば、世の中の障がい者ができない仕事というものが相当に減っていくんじゃないか。」

つながるまちにアートの風が吹く。

話を12月下旬にオープンする「アートゾーン 藝工倉庫」に戻す。ここに新しく建てるというコンセプトではなく、リノベーションで物件を考える。古い町並みを活かす文化を発信する。これは日本財団の意向でもあり、家主さんの理解を得ることができた。藝工倉庫一帯を借りることで、新しい文化ゾーンの形が見えてきたという。

「美術館を核にして、多目的シアターを作った。シネコンでは上映しないものを作ったり、芝居をしたり、ライブをしたり、真ん中では高知の食材を使った飲食店ができたら、賑わいが生まれるなと信田さんとも話していたんです。この場所が昔のままの姿で残っていることが、ある意味奇跡だと思います。それを大事に活かしながら、歴史を刻むという積み重ね、こういう在り方

を、高知県民や県外の方にお知らせすることができたという思いがあります。今度のアートゾーン 藝工倉庫というのは、事業を広げていくという意味では、僕にとっては一つの完成形になると思います。障がいのある人が新しいステイに立つ社会を作りたいと思いつきました。そのモデルケースとして飲食店があり、働く場所をつくり、賃金も一定レベルに達している障がい者には県の最低賃金以上の給料を支払うという目標も実現できました。さらには文化ゾーンであり観光資源にもなるような場所づくりができ、障がい者が自然とそういつたお店やアートゾーンに関われることになりました。

これから後は、コーディネーターの役割で、高知のみならず、日本中に障がいのある人が自然と社会のなかにいる環境づくりのお手伝いがしたいなと思っています。」

「アートゾーン 藝工倉庫」の詳細、オープニングのイベントはこれからマスコミなどを通じて発表されていくだろう。現状では未確定なので、次号から詳細を伝えていきたい。そして、県立美術館・御園地にあるオシャレなショップ「アートゾーン 藝工倉庫」高知市文化プラザがるぼーとなど、まちがつながり、アートの風が吹く。竹村さんの仕事の意義は大きい。新しい高知の文化の礎となる動きに、「季刊高知」はこれからも注目していきたいと思う。



アートゾーン 藝工倉庫のオープニングイベントやその後の運営について、毎週ミーティングする地元文化団体の代表者と竹村さん。この日は具体的なオープニングを議論し、それに相応しいイベントをどうするかを話し合った。またグラフィティではアートゾーン 藝工倉庫のグッズも展示されている。